みんなで育てる地域福祉

福島市

取材協力

蓬莱まちづくりコミュニティ「ぜぇね」

〒960-8157
福島市蓬莱町2丁目2-1
（蓬莱ショッピングセンター内）
TEL 024-548-3088

高齢者がいつでも外出でき、ともに楽しめる地域をめざして！

～まちの元気を呼びおこすコミュニティバス「くるくる」～

蓬莱ショッピングセンターを出発するコミュニティバス「くるくる」。住宅街にあふれる緑を縫いながら細い道へと入って行きます。その動きは文字通り“くるくる”。バスとは思えない軽快なうごきに取材陣もびっくり。

近年、高齢のために車の運転が困難になった、近くに知り合いがいないので用事を頼めない…などの理由から外出を控える方が増えています。福島市の蓬莱まちづくりコミュニティ「ぜぇね」では、通院や買い物の足として無料で利用できるコミュニティバス「くるくる」を平成20年6月から運行開始。新しい絆が生まれています。

次は「渡辺さん家」。団地を走るコミュニティバス

蓬莱まちづくりコミュニティ「ぜぇね」代表の小林悦子さん。「つながりのある地域を創りたい。その気持ちが私の原点です」。

福島市の蓬莱団地は、昭和42年代から分譲が始まりニュータウンとして発展しましたが、現在は少子化・核家族化などから高齢者世帯が多く暮らしています。平成16年当時、蓬莱団地の空き家対策の調査を行なっていた建築士の小林悦子さんは、放置された空き家による団地の治安の低下や庭木の管理不足などに気づく一方で、団地に暮らす者同士の交流があまりにも希薄なことに驚いたといいます。

「隣に住んでいる人の顔も分からないような感じでしたね。折しも団地の中心部にある蓬莱ショッピングセンターの管理者である住宅供給公社の解散により、どのような運営になるかが懸念されていた時期でもありました」と小林さん。その後、地域住民や商店の代表、商工会議所、大学の教授などを交えた話し合いを重ね、ショッピングセンターは平成20年に民間企業の運営で生まれ変わりました。「しかし、今までとは異なる運営のため、売り上げがなければ店舗の継続も難しくなるという問題が新たに出てきました。店舗がなくなれば、近くで買い物もできません。地元の方たちが地元で買い物をすることが、結果的に自分たちの生活を守ることにつながるのです。また、高齢者が自立して元気に出歩けるような地域を創りたいという思いも重なって、バス運行の企画は生まれました」と小林さん。

「美しい自然があふれる蓬莱団地ですが、坂道が多いのが難点。高齢者にとっては大通りまで出てくるのがひと苦労なんです」。どうしたら不便なくバスに乗ってもらえるのか、小林さんたちはコースの設定、停留所の位置など試行錯誤を繰り返しました。そして、自由にコースを設定でき、停留所以外でも乗り降りできるようにと、運賃を設定しない会員制の貸切バスの形態で運行することにしました。こうして、団地の住民や地元企業などの協力を得ながら、平成20年6月にコミュニティバス「くるくる」が運行をスタートしました。

コースは既存の路線バスが通らない住宅地などの通りを重点に巡る3コースを設けました。停留所には「渡辺さん家」「きよさん家」…などの名前が連なり、団地の公園や集会所、美容室、レストランなどで自由に乗り降りすることができます。

「コミュニティ団体からの寄付、地元商店・公共機関などから運行協力金をいただき、1日何回でも無料で乗ることができます。バスの運転は安全性を考えてタクシー会社さんにお願いしています」と小林さん。昨年は3コース合計で年間約1万8千人、月平均約1千5百人の利用がありました。

停留所の数は3コースで54カ所。運転士と乗客らのコミュニケーションも抜群で、降車ベルを押さなくても自宅付近で停まってくれます。

「くるくるバスは生活に潤いをプラスしてくれる存在。これからも応援します」と、いちい蓬莱店代表取締役常務の伊藤弘人さん。

地域のみんながくるくるバスを応援！

蓬莱ショッピングセンターの敷地内にある「いちい蓬莱店」は、コミュニティバス「くるくる」を立ち上げの頃から見守ってきた協力企業のひとつ。代表取締役常務の伊藤弘人さんは「いちいでは、蓬莱団地の造成が始まってすぐ、まだショッピングセンターが建設されていない頃から仮店舗をオープンしていましたから、地域の皆さんと共に歩んでいるという実感があります。くるくるバスの運行が始まってから、高齢者の方がゆっくりと時間をかけて買い物を楽しむ姿を多く見るようになりました」と教えてくれました。いちい店内には、くるくるバスの運行資金の募金箱が設けられ、昨年は地域から約20万円の寄付金が寄せられました。

くるくるバスの運行にともなって、ショッピングセンター内の待合室にも変化が訪れました。それは団地の住民同士の何気ない会話。バスの中でも話が弾み、思わず乗り過ごしてしまった…という利用者もいるとのこと。単なる買い物バスに終わらない豊かなコミュニケーションが、くるくるバスを軸に新しい広がりを見せています。

バスから生まれる新しいふれあいの輪

くるくるバスをふだんから利用している斉藤幸子さんは、平成16年に蓬莱団地に移り、現在はひとり暮らし。「足の具合がわるく、車も運転しませんので、くるくるバスにはお世話になっています。おかげさまで友だちも増えました」と笑顔。もう一人の利用者、斎藤ミツ子さんも「ふだんはAコースだけど、他のコースにも乗っています。春には、バスに揺られながら団地の見事な桜を楽しむこともできるの。みんなにも乗ってほしい」と、くるくるバスの運行を応援しています。

斉藤幸子さん。今日はくるくるバスを利用して買い物を楽しみました。

「バスに乗るとみんなすぐに仲良くなっちゃうの」と、利用者の斎藤ミツ子さん。

団地の裏通りを中心に走るくるくるバスは、認知症の方の発見や登下校の子どもたちの見守りといった効果もあり、その姿は地域にやさしくとけこんでいます。

「バスの運行資金が今後の課題といえますが、将来的には地域の自主運行バスとして継続されればよいと考えています。ふだんの利用の他にも、バスを運行しない土日には有料で貸し出したり、地域の文化祭や投票日に使ってもらうなど、バス1台あればできることって意外とたくさんあるんですよ」と小林さん。その目の先に、今日もまちの元気を訪ねて出発するバスの姿がありました。